六花

11

2022

りっかはいくかい

三鬼の運河　◎　山田六甲

成就せしまなこ美し蝉落ちて
大壺にくるりと廻る芒束
手枕は月見によしと宝蔵寺
十三夜の噂たちまち東山
酒呑みのコスモス愛でて般若寺
稲刈のあとしばらくや石叩
ひな菊に鍋で水やる濱食堂
尾上の野菊咲きゐる運河べり
緑青や肥料御殿の天高く
残る虫運河の橋を渡るとき
欄干に胸当てて見る秋の河
野菊咲く処へ橋を遠回り
秋風に潮の匂ひの別府あたり
須磨のこと考へてゐる十三夜
秋の蚊やあかがね御殿潮にほふ
椅子立てば急によろめく秋半ば
別府運河三鬼の頃の水澄むか
叩かれて石は四角に秋桜
身に入むや鳥居に国歌刻みあり
手枕の松色変へず瓢水碑
緑青に秋日の当たる運河べり

PDF= 俳誌の salon

踊りつつ思はれ人に近づきぬ　志方章子

おどりつつおもわれびとにちかづきぬ

「章子さんが好き」と告白を受けたのか、誰からか「信如君があなたを好いてるわよ」と伝えられたのか妙に意識している私と彼。おどりの輪はだんだん彼が近づいてくる。心臓が口から出そうになり、足許がおぼつかない。だんだん近づいてくる彼の前によろけて倒れそうになる場面。青春の忘れられないひととき。いや盆踊りでなく運動会のフォークダンスの思い出と重なる。思われ人とは。

（六甲）

雪嶺抄

海ほほずき　◎　笹村　政子

潮騒に海酸漿を鳴らしけり
蝉の穴闇を吹き抜く風ありや
松ヶ枝に神官のもの海開き
わが影に鯉の寄りくる晩夏かな
会釈して踊りの輪へと入りにけり
川風に篝火ながれ踊唄
初秋や小皿にたらすオリーブ油
静止画の刻をながるる桐一葉
鮎買うて笊の水切る勝手口
亡き夫の山河へ遠し鮎を食む

潮騒に海酸漿を鳴らしけり　笹村　政子
しおさいにうみほおずきをならしけり

潮騒（しおさい）といえば、三島由紀夫の代表作の一つを思い起こすだろう。政子の実家も潮騒の聞こえるところだと思う。句の内容はあきらかに少女時代のものを思い起こして詠んだのか。「海ほおずき」は辞書によると「巻貝の卵嚢（らんのう）のことで植物のホオズキと使用方法が似ており、かつては口に含んで音を鳴らして遊ぶ使い捨ての玩具として縁日や海辺の駄菓屋で売られていた」と。今は知らない人が増えているが、昭和中期の玩具の少なかったころは子どもたち、特に少女には人気があった。海に近い私の田舎では魚屋に時折出ていたこともある。潮騒の聞こえる中で鳴らして遊んだよ、という回顧の句。非常に省略の利いた句なので鑑賞の幅が広がる。同時作、彼女が「亡き夫」の句を詠むのは珍しい。

PDF= 俳誌の salon

蟋蟀抄

思はれ人　◎　志方　章子

しばらくを病みてゐる間の窓の秋
病葉のはらりと病癒えにけり
周辺の白く光れる暑さかな
入り交じる線香の香と桃の香と
子の胸のふくらみきたる水着かな
風鈴の音色するどき寝入りばな
風の様にも秋近き風情かな
芋殻さす野菜たちまち馬となり
遠目にも清かとなりぬ島の秋
踊りつつ思はれ人に近づきぬ

踊りつつ思はれ人に近づきぬ　志方　章子
おどりつつおもわれびとにちかづきぬ

「思われ人」という設定は今まで誰も詠まれなかったと思う。踊りとは本来盂蘭盆に踊る供養のこと。輪になって踊り、輪が少しづつ回るから、自らの意思と関係なく互いに対象の人に近づく。その人が近づいてくるほどに緊張がつのる。作者は自分のことを思われていると知っているから、目を合わせていいものか、知らぬふりして踊り過ぎるのか迷いながらの踊りで、手足がぎこちなくなろう。そういう気持ちの高ぶりを描かれて。踊りの句として出色。「盆踊」の意義は本来死者の供養であるが、生者には子孫繁栄の刺激の強い踊り。そこに照準を合わせたところが佳い。夢風撰。

はまなす抄

蓮ひらく　◎　升田ヤス子

花びらに花びらの翳白はちす
少年の歌ふ高音蓮ひらく
さみどりの巻葉の添へり蓮の花
葉の返す光も花よ未草
蒲の穂にまぎれて鳥の巣はないか
磨き盆新(さ)らのタオルを切り分けて
器ごと冷やして盆の僧のお茶
踊りけりもつこ担いで網引いて
サラリーマン踊り始めて別人に
鱧料る味を知らずに育ちきて

少年の歌ふ高音蓮ひらく　升田ヤス子
しょうねんのうたうこうおんはすひらく

変声期の少年を詠んだ。少年の声変わりは多く夏休み中に起こる。と思うのは夏休みの見かけない間に起こるからだと思う。掲句も蓮の開く時期に声変わりが起こったので、作者も驚いたのであろう。ともに成長を驚き喜んでいる。この少年も合唱団に入れようと思うくらい美声音の少年なのだろう。それが関西で言う「おっさん」に変わった驚きも読みとれる。彼女は今月「磨き盆」というあまり聞き慣れない題材を出してくるので勉強になる。仏磨き盆とは仏具や食器を洗って盂蘭盆を迎える準備をすること。膳洗い。お磨きなどとも言う。翳は「かげ」と読む。谷崎なども「陰翳礼賛」と書く。
「器ごと冷やす」という心遣いが嬉しい。

PDF= 俳誌の salon

聖五月抄

ほどよき胡瓜　◎　善野　行

薔薇の名に沙翁の劇の小公女
白南風や首据わるのもあと少し
葉の裏にほどよき胡瓜ありにけり
寝坊してお化けきうりとなりにけり
草を掻き上げ炎帝に水の玉
塵の世にあるいとしさよ天の川
七夕の願ひは刀自の平癒のみ
山国や百人替はる音頭取
闇を出て闇に溶けゆく踊かな
み吉野のみどりの風の夏料理

葉の裏にほどよき胡瓜ありにけり
はのうらにほどよききゅうりありにけり

ほどよい大きさの胡瓜は採る時期（時間）を逸すると、もういけない。市場に出せない大きすぎたり曲がったりのキュウリ。同時句にあるように「寝坊してお化けきゅうり」とはキュウリを採るのに二三時間遅れるだけでも価値は下がり、市場に出せない品物で、家で消費するかご近所にくばらなければいけないし手間だ。夏野菜の旺盛な成長の時期の見極めが大切。しかし市場に出回る胡瓜は本来の大きさではない。胡瓜も元々は大きな黄色の瓜という意味。句の「ほどよき」とは家で食するにはほどよい、という意味であろうか市場に出せるという意味であろうか。

垂水抄

落蝉の　◎　永田万年青

汗だくのシャツ脱がぬままシャワー浴ぶ
次々と湧き出る子等よ夏祭
紅白の百日紅に撫でらるる
蝉しぐれビルの中まで聞こえぬし
落蝉の日かげに置けば飛びて果つ
浴衣の子大人びてをりふくらはぎ
藍柄の揃ひの浴衣姉妹
かき氷互ひのシャツに染みのあり
列島の東は豪雨西猛暑
幾たびもおなじ場面の昼寝覚

落蝉の日かげに置けば飛びて果つ
おちぜみのひかげにおけばとびてはつ

地に落ちて死んでいるのかと思い、強い太陽に曝しておくのもかわいそうだと日陰においてやったら、急に飛び立って落ちて死んだ。蝉にとっては最期のあがきだったのか。断末魔の時に上げる苦しみゆえの行動か。死ぬ間際に、痛みや苦しみなどから大声を上げる、というのは人間の本能であり、また生に執着することも人間の本能であるため、断末魔の叫びはこれから死ぬという恐怖、生が終わってしまうという後悔など、様々な感情の集約したものであるともいわれるが、往生のとき本当は眠くて仕方がないと言う人もある。「幾たびも」の句は夢風撰候補。私も子供のころから夢が醒めるときよく同じ場面を見る。

PDF= 俳誌の salon

箕面抄

夜の秋　◎　出口　誠

心地よき風に恵まれ夜の秋
「わわわわう」犬鳴いてをり夜の秋
盛夏より洗濯多き残暑かな
何もかも題目にして残暑かな
結局は水を欲しがる残暑かな
墓参りすでに終はりぬ盂蘭盆会
ゆで卵夕食にする盂蘭盆会
久々の酒がおいしき盂蘭盆会
特別に何もせぬまま盂蘭盆会
あと一句あと一句とや盂蘭盆会

「わわわわう」犬鳴いてをり夜の秋
わわわわういぬないておりよるのあき

犬も俳句では五七五の五音で吠えるのだと感心。犬は嬉しいときも鳴く。「今夜は涼しいなあ」とご主人様につぶやいているのだろう。人間は犬と長く暮らすと犬の言葉が分かるようになるし猫の声も理解できるようになる。犬と人間のコミュニケーションが巧くいけば楽しい。まこと君もついに犬と話が出来るようになったのか。六甲は猫と会話が出来るようになってきたら猫が死んだ。今は近くの公園猫ちゃんに毎晩行って餌をやる。いつものメンバーは五匹。まこと君は、あと一句あと一句と思考を巡らす素晴らしい人。夜の秋の句は「恵まれ」が佳い。

酒呑抄

美女の後ろ　◎　谷口一献

何もなき故郷にある盆踊
掻き分けて美女の後ろや盆踊
海猫踊る伊根の舟屋の遊覧船
股のぞきして立眩む炎天下
句作りは深夜に進む水中花
水馬ひと掻きしてはまた思案
蝉時雨ふと気がつけばはたと止み
軋む櫓に老鶯の遠音かな
童心に帰す花野や風立ちぬ
首筋に秋の気配の独り酒

股のぞきして立眩む炎天下
またのぞきしてたちくらむえんてんか

日本三景を一献らしい句で表現。股のぞきとは、文字通り股の間から天橋立をのぞく。まず笠松公園で天橋立に背中を向けて立ち、前屈の姿勢を取って股の間から天橋立を眺めると、直立して眺めるのとは違った体勢から眺めることで脳が錯視を起こし、遠近感や大きさが変わって見え、天に舞い上がる龍のように見えるから「飛龍観」とも。
天橋立は日本三景の一つ。一献は立ちくらみに気がついたが、飲んだ酒が逆流してくる方が怖い。

PDF= 俳誌の salon

別府抄

蓮の葉の葉脈　◎　廣畑育子

紅蓮の風のテラスに佇めり
蓮の葉の葉脈力強かりき
静けさに揺れゐるばかりなる蓮
蓮池の底を見むとて手廂す
海鵜発つ長き助走の水面かな
草刈り機ああああうううと畦すすむ
はだしの子みどりふさふさ芝の中
噴水を掴まむとせる子の顔に
しばらくは噴水の穴覗ける子
鳧群るる水面に青き空映り

蓮の葉の葉脈力強かりき
はすのはのようみゃくちからづよかりき

あのきれいで清浄な蓮の葉の葉脈をみて力強いと感じ取ったのがさすが。蓮の花は泥の中と繋がっているものの、全く穢れの無い綺麗な花を咲かせることから、仏教では穢れた俗世間にありながらも全く穢れに染まることなくその中から綺麗な花を咲かせることこそ菩薩や如来の仏の姿であると説く。だが意外に茎は細く伸びている。が葉脈には力強さがあると看破した。蓮の茎にも蓮根も九つの穴が空いていて泥水の中でも息をしている。何年か前に皆で象鼻杯を楽しんだ。もちろん般若湯で。夢風撰候補。

相生抄

盆踊　◎　江見　巌

白日傘回して母のそばに居る
糊浴衣ピシッと利きてものを書く
頑固さの男はなさぬサングラス
盆踊城の大きく小さくなり
母の袖引つ張つていく夏の雲
ニッキ飴子供寄り付く夜店かな
約束の守れぬ墓や盆帰省
大臣を越える人増え生身魂
木の上に鶏の止まるや地蔵盆
椋鳥の囲ひ込みたる本能寺

盆踊城の大きく小さくなり
ぼんおどりしろのおおきくちさくなり

城はどこの城でもよいが、踊っていると城の見え方が、大きくなったりちいさくなったりするのは気づかなかった。盆踊りの輪を踊り進むうちに近づいたり遠ざかったりするのであろうか。この句を理解できぬ私が、踊りの輪に入ったことがないせいであろう。が何かあるような気がする魅力を感じる。作者に近い城とは姫路城であろうか。木の上に鶏の止まる光景は佳い。鶏は雉の仲間。子どもたちが地蔵盆で集まり、うるさくて鶏は木に登ったにちがいない。鶏はもともと飛んでいた。ニッキ飴は懐かしい味と香り。椋鳥の句、本能寺に攻め入った兵を椋鳥と椰揄しているのかも。小林一茶は信州の田舎者の大食いのことを椋鳥と揶揄されたと言っている。

PDF= 俳誌の salon

垂水の奥抄

お滝さん　◎　草場つくし

睡蓮は日に日に水を隠しけり
睡蓮に雨粒落ちてなほ静か
紫陽花や願ひは一つお滝さん
群青へ真白きしぶき消えて滝
心拍にシンクロしたる鼓滝
帰路のバスこつくりこくり夏夕べ
炎昼や就活生の黒スーツ
汗引いて待ち合せ場所一人ぼち
七夕や太き紙縒に小さき夢
年々と願ひはうすれ星祭

紫陽花や願ひは一つお滝さん
　あじさいやねがいはひとつおたきさん

江戸時代、巷で噂の名医、シーボルトのところへ患者としてやって来たのは、長崎の遊女其扇（そのぎ）、本名「お滝」だが一目惚れしたシーボルトは故郷の両親に宛てて「日本で素敵な女性と結婚をした。お滝さん以外の女性を妻に迎えることは絶対にない」と手紙を送っているという。やがて二人の間には「お稲」という女の子も生まれ後に女医となる。アジサイのオタクサは正式植物名ではないが、一般にはアジサイのオタクサが広がり、作者もお滝にならって、そのロマンに浸りたい願いなのかも。以前幻のガクアジサイは六甲山にあると噂が広がって六甲山小学校に見に行ったことがある。今はどうか知らない。

神吉抄

飴細工　◎　磯野青之里

七夕や短冊はみ出るクレヨン字
踊りの輪上手加はりはなやげり
古里の踊を遠く深夜バス
村中を開けつ放して昼寝びと
夏風邪や日射し眩しきくもり空
飴細工夜店の電球柔らかし
西日射す０対０の甲子園
草の根に塊土は固し夏渇く
広島を止める黙祷夏巡る
ステテコのままで茶漬や終戦日

飴細工夜店の電球柔らかし
　あめざいくよみせのでんきゅうやわらかし

平成から令和に変わるころ。電球は冷たい色の蛍光灯に変わり、平成から令和になって電球型の省エネタイプ「ＬＥＤ」になった。その光は虫を呼ばないが昔の電球には火取虫が乱舞した。発光ダイオードになってＬＥＤの光の波長には紫外線がないため虫には見えないので、照明を光と認識していないという。とすると作者の詠む裸電球は紫外線を含む白熱電球だったのだろう。電球の周りを虫たちが乱舞しているほうが夜店の雰囲気があった。谷崎潤一郎は「陰翳礼賛」で京都の宿が行燈から電球照明に変わったことを嘆いている。人間はだんだん強い照明に慣れて来ている。作者のように電球の光が柔らかいと感じた耽美感覚が佳い。肌でも光を感じていたのだろう。

PDF= 俳誌の salon

タジッサ抄

打ち水　◎　田尻りさ

鈴虫の焔と鳴きて直ぐ沈黙
とうもろこし食めば汗から香りけり
仏壇に悪態をつき盆用意
黙祷の後ろの川や原爆忌
嬉しさやアガパンサスを思ひ出し
ホームレスの野球観戦甲子園
打ち水の軒並み出でて始まりぬ
蝉の音の変はりて寂し風の吹く
大鉢に球根密む彼岸花
秋風や縄文の香の漢方薬

打ち水の軒並み出でて始まりぬ
　うちみずののきなみいでてはじまりぬ

暑さもきわまる午後三時頃に町内の人たちが伸し合わせしたように、打ち水をする光景が昔あった。午後三時頃には西日が強く耐えがたい暑さに閉口するのだろう。

今のアスファルトと違って地道だから打った水を吸い込み、気化熱の効果で少し涼しくなった。打ち水のしばらくあとはきまったように夕立がどつと来た。「仏壇に悪態をつき」もおもしろい。先祖に恨み辛みをいうのだろう。「蝉の音」の句も佳い。縄文の香りは独特の感覚だが、誰にもわかる中の独自性があれば名句として残る。打水は夢風撰二席。

日記抄抄

からあゐ　◎　浜田久美子

からあゐと歌碑にありけり鶏頭花
鶏頭や出石白磁に二三本
鶏頭を生けて古里遠くあり
鶏頭やビロードの襞重々と
秋桜揺れてわが胸打たれけり
あれ何と名月を指す二才の子
名月や苦悩突き抜け見上げれば
石垣に色なき風の吹きにけり
蹲に仏彫られし菊日和
別れ際友の一声鵙日和

からあゐと歌碑にありけり鶏頭花
　からあいとかひにありけりけいとうか

鶏頭の別名はからあいで万葉集に「韓藍（からあい）とは、ケイトウの古名。「わが屋戸（やど）に―蒔き生（お）ほし枯れぬれど」〈万・三八四〉がある。文字通り唐国から到来した品種で園芸図鑑によると「日本には野生種は存在せず、インドなどの熱帯アジア原産の植物で、平安時代以前に大陸から渡ったとされ、万葉集に「韓藍（カラアイ）」の名称で登場。日本原産ではない植物だが、日本の気候が生育に適するため、品種改良が盛んで、世界で園芸品種や切り花品種として流通しているケイトウはほぼすべて日本で育種されたもの」という。「カラアイ」という音感を刺激するよろしさがある。また、出石白磁に鶏頭の紅は鮮やかに通い合う。

PDF= 俳誌の salon